

ハワイ語の方向詞における「基準点」の選択

岩崎 加奈絵

(日本学術振興会特別研究員PD/東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

要旨

本研究の目的は、ハワイ語の「方向詞」が何・どこを基準に方向を判断しマークするのか、その基準点の選択や交替の条件について考察することである。具体的にはハワイ語民話 “He Moololo o Kawelo” の第1章を対象に、方向詞と共起する内容語を出現順に抽出し、各例における方向判断の基準点の変遷を図表化し、それに基づく考察を行った。本研究の範囲では基準点の交替の条件や動機については明確なものを見いだせなかったが、以下の3点を明らかにした。(1)主人公性は基準点への選ばれやすさに明確に寄与するとはいえない、(2)基準点になりやすいのは圧倒的に有生名詞ではあるが、それ以外、特に「場所」も基準点となり得る、(3)対話場面で発言動詞と方向詞が共起する場合、多くは動作主の変化に関わらず一貫した基準点が置かれるが、それに当てはまらない不規則な変化を示す例もある。

1. ハワイ語「方向詞」と先行研究におけるその記述

東部ポリネシアの言語には、典型的には動作を表わす内容語に後続し、その動作の展開する方向を表わす機能語がみられる。言語によってさまざまな呼称・機能があるが、ハワイ語では一般に directional (以下「方向詞」と称される。Elbert and Pukui (1979: 180) は方向詞を “A particle indicating movement in relation to the speaker” と定義する。比較的近年の研究である Schütz, Kanada and Cook (2005: 51, 52) は、 “A marker or construction that indicates literal or metaphorical movement toward a place (as opposed to LOCATIONAL (or LOCATIVE), which indicates position at a place)” とする (なお同研究は Elbert and Pukui より広く、from/to 相当の前置詞も含めて1つのカテゴリと見ている)。

この「方向詞」は、定義から読み取れる通り、典型的には空間表現の一種として使用されるものであり、aku (離れていく) -mai (近付いてくる) と、a'e (上に) -iho (下に)、合わせて4語が存在する。以下は内容語 hele 「移動する」と共起する例である。

(1) **Hele mai!** 'Come!' **Hele iho!** 'Go down!' **Hele a'e!** 'Go up!' **Hele aku!** 'Go away!'
(Elbert and Pukui 1979: 91)

これに加え、一般に指示代名詞とされる “la” を後ろに伴う形も存在する (akula, maila, a'ela, ihola)。laの有無による差については言及はあるが整理されてるとも言い難い状況であり、la形は narrative においてアスペクトマーカの役割を果たすとされるが (Schütz, Kanada and Cook 2005: 110)、詳細の定かではない部分も多い。

方向詞の多様な用法のうち、比較用法や時間用法については個別の研究がその記述を補っている (塩谷 2007、Cook 1996 など)。一方、空間用法は基礎的な用法の説明こそ初期の段階からなされているが、使用に当たって「何・誰」を基準としてある動作の向きを判断するのか、という点についての記述・説明に乏しい。発表者はこの方向詞について、主に数量に着目しこれまで度々取り上

げ（岩崎 2018など）、それで明らかにならなかった点については「語り」の文脈の中で捉えることを試みている¹が、結果としていまだ十分な議論や記述ができていない状況である。

2. 問い

1に基づき、本研究の根本的な問いは次のように提示される。

- (2) 方向詞のあらかず方向、とりわけ「離れていく—近付いてくる」をマークする際に必要な、「誰・何から見た方向であるか」、すなわち方向判断の「基準点」になれるものは具体的にどんなものか、その基準点はどのような条件で切り替わるか（切り替わらないか）？

これらについて、先行研究では管見の限り明文化されていない。この点は、仮に一人称主語文であれば基本的に話者を基準点にできるとしても、発表者が主に取り扱っている民話テキスト資料に多く見られる三人称主語文、いわゆる「神の視点」文では特に問題になる。

また、Elbert and Pukui (1979: 92) では、発言に関する動詞に方向詞が付く場合が取り立てて言及されており、「十分に研究されてはいない」とするに留まっているが、著者らは何らかの点で特異性を有すると考えていた可能性がある。また、対話の場面は、**発言を表わす動詞が、登場人物が主語および動作主を交互に担う形で連続しやすい**という特徴があり、基準点の交替を考察するうえでも注目に値する。これら両点を考慮し、発言動詞と方向詞との共起についても特に着目した。

3. 手法

本発表で対象とするハワイ語は、19世紀～20世紀初頭までの自然継承期のハワイ語とする。この時期は、ハワイ語が家庭やコミュニティのなかで広く、かつ自然に世代間継承されていた時期、また、現在にまで残る文字資料が盛んに産出されていた時期でもある。

今回分析の対象としたテキスト資料は、民話 “He Moololo o Kawelo” (Elbert 1959: 32-55)² の第一章（218文、4583語）である。この章は、Kaweloという物語通しての主人公が、生まれ、少年時代を過ごし、成長と共に並外れた能力を見せて名声を高めていくところまでを描写したものであり、転居や場所の移動に関する表現を一定程度含むものとして選出した。分析に際しては、できごとと登場人物とに着目し、(1) Kaweloの誕生と幼少期の話、(2) Kaweloが移住して強い戦士と勝負する話、(3) Kaweloが漁を学び巨魚と戦う話、(4) Kaweloの両親から使者が派遣される話、(5) Kaweloが使者たちに会い用件を聞く話、の5つの場面に分割した。

本研究では物語あるいは「語り」の連続体における基準点の変遷を見ることで、基準点が切り替わる場合、そこに文脈情報や人物同士の関係などの要因も含め、何らかの理由付けが可能かどうか考察することを重視した。そのため、文脈から切り離さない・用例の前後が確認しやすい形でデータを取りまとめつつ、用例の検討ができるよう進めた。

具体的には、まず、文中の“,”を区切り記号としてテキストを分割した「句」のリストを作成し、

¹ 「ハワイ語民話テキストにおける主語と視点の関係性」（口頭発表、言語学フェス 2022、2022年1月29日）など。



² 文献を使用するのはハワイ語母語話者へのインタビュー調査が難しい状況にあるためである。この民話はもともと Fornander and Thrum (1918) “Fornander Collection of Hawaiian Antiquities and Folk-lore” に収録されていたもので、その段階からハワイ語文と英訳文の両方が掲載されていた資料である。

その中に何らかの「動作」に当たる内容語が含まれる場合、その内容語を1例と数え、方向詞の有無にかかわらず全ての例にタグ付けを行った。句中に複数の「動作」があった場合はそれぞれを1例としてカウントした。なお、この「動作」は便宜的なカテゴリ名であり、一般的な動作より広い範囲のものが実際には含まれている。物語中で何らかのできごとや状態（の変化）が発生したことを示す内容語を指す。また、関係する可能性があると考えタグ付けをしたのは「話法」「統語的主語」「品詞」「動作主」「被動者」「共起する方向詞」「同句中のその他の空間表現」であるが、下表では議論に直接関係するもののみ掲載している。

4. データ

方向詞を伴う内容語は、今回の範囲ではのべ250例得られた。表1から表5は、場面ごとに見られた例を出現順に並べたものである（表3・表5は配置の都合上2列に分かれている）。紙幅の都合により表中の文字サイズは小さく視認性はやや低いが、これらの表によって示したい最も重要な点は、個々の語や方向詞の選択ではなく、基準点の変化、すなわち各表右側に示した「塗りつぶし」の箇所の変移である。

塗りつぶされた場所はその「動作」ともなう方向詞の示す方向を判断するときの基準点となったと想定される人・モノである。場面ごとに主要な登場人物が異なるため、1列目の主人公・Kawelo以外は表ごとに項目が異なる。主要な人物の項目に加え、登場回数も「基準」を担う回数も少ないものをまとめた「その他」を置いた。複数箇所が塗りつぶされている「動作」は、基準点と思われる人・モノが複数ある例である。

その他、網掛けがされている（部）「動作」は、意味内容が「発言」に関する語であることを示す。また「基準点」の塗りつぶしが点模様のも（部）は、人・モノではなく場所を基準点とする例である（5.1参照）。

文中での切り替えについても把握しやすくするため、その文が一章中の何文目に当たるかを示した文番号も併記する。その他、個別の注記事項は紙面の都合上、表3下部にまとめて示した。

5. データからいえること

5.1 「何が基準点になりやすいか」について

どのようなモノが基準点になりやすいのか、という点についていえば、ほとんどは人を中心とする有生名詞であったが、モノ（槍・海）など無生物が選ばれる場合も20例以上あり、珍しくはない。

有生名詞のなかでも、全体を通して基準点となった数は主人公であるKaweloが最も多く、約半数の例で基準点となっている。ただし、これをもって「語りの主人公は基準点として選ばれやすい」と判断できるかどうかは慎重に考える必要がある。Kaweloは主人公であるゆえに、他のどの登場人物よりも登場シーンが多い。そのために、単に数も多くなったという可能性もあるからである。実際、今回の範囲では、Kaweloの有する主人公性が個々の状況において、基準点の設定に強く影響したとは言い切れない。例えば、表5・通し番号189-203のKaweloと使者たちが出会う場面では、物語中この場面でしか名の出されない人物たちと主人公Kaweloとの間でも頻繁に基準点が交替している。よって、主人公性が基準点の選択に関係するかについては別資料との比較が少なくとも必要である。

表1 場面1における「動作」・方向詞・基準点の推移

通し 番号	文 番号	動作	方向詞	基準点			
				Kawelo	祖父母	Kauahoa	その他
1	6	nui	ae				■
2	7	hai	aku		■		
3	9	lawe	aela				
4	9	hanai	ihola				
5	11	hoi	aela				
6	13	pela	aku	■			
7	13	pela	aku	■			
8	13	imi	ihola		■		
9	14	pii	akula				
10	14	hoi	maila				
11	14	haawi	akula		■		
12	14	hoehoe	ihola	■			
13	14	lilo	ihola				■
14	15	ike	maila	■			
15	15	hana	ihola			■	
16	15	hoolele	aela				
17	15	makemake	ihola	■			
18	15	hoi	akula				
19	16	hana	ihola		■		
20	16	hoolele	aela	■			
21	16	hoolele pu	aela	■			
22	17	hihia	aela				■
23	17	moku	ihola				
24	17	lilo	akula				■
25	18	nana	akula	■			
26	18	kii	mai				
27	18	noonoo	ihola				
28	19	hookahekahe	ihola	■		■	
29	19	oi	akula				■
30	19	noonoo	ihola	■			
31	20	kaawale	aku			■	
32	21	olelo	mai	■			

表2 場面2における「動作」・方向詞・基準点の推移

通し 番号	文 番号	動作	方向詞	基準点		
				Kawelo	兄弟たち	その他
33	22	holo	maila			■
34	25	hoi	akula		■	
35	25	hoi	akula		■	
36	26	hu	aela			■
37	26	holo	maila		■	
38	26	ike	ihola			■
39	26	noho	ihola			■
40	27	moe	ihola	■		
41	27	noho pu	ihola	■		
42	28	lohe	akula			
43	28	ninau	aku			
44	29	uwa	mai			
45	30	i	mai	■		
46	31	hele	akula		■	
47	31	hoi	maila			■
48	31	hina	ihola		■	
49	31	uwa	aela		■	
50	32	olioli	ihola	■		
51	32	iho	akula	■		
52	33	nonoi	akula	■		
53	33	loaa	maila	■		
54	33	au	akula	■		
55	33	hee	ihola	■	■	
56	33	hoi	akula	■		
57	33	hoi	akula	■		
58	34	ku	aela	■		
59	35	i	mai	■		
60	36	ole loa	aku	■		
61	37	maliu	aku	■		
62	37	ku	ihola	■		
63	38	olelo	mai	■		
64	40	hai	akula	■		
65	45	lilo	ihola			■
66	46	hina	ihola	■		
67	46	kau	ihola	■		
68	46	uwe	aela			■
69	47	hilahila	ihola		■	
70	47	hoi	akula		■	
71	48	ninau	maila		■	
72	50	i	akula		■	
73	51	pehi ia	mai		■	
74	52	noho	ihola	■		
75	53	ao	ihola	■		
76	53	ao	ihola			■
77	54	ao	ihola	■		

表3 場面3における「動作」・方向詞・基準点の推移

通し 番号	文 番号	動作	方向詞	基準点			通し 番号	文 番号	動作	方向詞	基準点		
				Kawelo	Maakuakeke	その他					Kawelo	Maakuakeke	その他
78	56	ala	aela	■			117	97	i	mai	■		
79	56	hele	akula	■			118	98	holo	aku	■		
80	56	paha	akula	■			119	98	hoi	mai			■
81	57	lawe	mai	■			120	101	moe	ihola	■		
82	58	hoala	akula			■	121	101	hele hou	akula	■		
83	60	ala	aela		■		122	103	hele	aku			■
84	60	kahea	mai		■		123	105	hiki	maila	■		
85	60	hele	akula	■			124	106	koi	akula		■	
86	60	holo	akula	■			125	107	ae	mai			
87	61	kahea	mai	■			126	111	hei	aela			■
88	63 (ioe)		maila		■		127	111	nana	aku	■	■	
89	64	olelo	mai	■			128	112	kahea	aku		■	
90	65	hoi	aku	■			129	115	kahea	mai			
91	66	i	aku				130	117	i	aku			
92	68	i hou	aku				131	118	oki	aku	■		
93	71	lalau	akula				132	119	olelo	mai			
94	71	mama	ihola				133	121	moe	ihola	■		
95	72	lawaia	akula	■	■		134	121	paa	ihola			■
96	73	noonoo	ihola		■		135	122	alawa	aela		■	
97	73	olelo	aku				136	122	makau	ihola		■	
98	75	pela	mai				137	123	hoea	mai			■
99	76	i	aku		■		138	123	?malaila	mai			■
100	78	hoi	maila			■	139	124	i	aku		■	
101	78	hopu	ihola	■			140	126	i	aku	■		
102	78	hoi	maila			■	141	128	i	aku		■	
103	79	hele	akula	■			142	130	i	mai			
104	79	hoi	maila			■	143	132	holo	maila			■
105	79	kahea	akula	■			144	134	i	aku	■		
106	80	lawe	maila	■			145	136	nonoi	mai	■		
107	80	ai	ihola				146	138	huli	maila			■
108	80	kahea hou	akula	■			147	138	manao	ihola		■	
109	80	lawe hou	mai				148	139	ala	aela	■		
110	80	lawe hou	maila				149	139	ku	ihola			
111	80	ai	ihola				150	143	hei	akula			
112	80	maona	ihola				151	143	make	akula	■		
113	81	kahea	akula				152	144	noho	mai			■
114	82	lawe ia	mai				153	145	unuhi	ae	■		
115	82	nana	aela			■	154	146	hoopili	maila			■
116	95	kau	mai										

*表3・通し番号88の(ioe)は、文章表現上本文では異なる表記になっているが辞書ではioeの形で掲載されており、表では辞書の形を採用したため、括弧を付している。

**表3・通し番号138のmalailaは、これを今回の基準に照らして「動作」と取るか判断が難しかったため、そのことを示してクエスチョンマークを付している。

***表5・通し番号246・247は、具体的な動作ではないが、道具の形容に含まれる動作(ネズミ捕りの弓・カヌー掘りの斧)に付されたものと考え、今回の基準に照らした「動作」ではないため同項を空欄としつつも、定型表現とまではいえないため独立した例として掲載したものである。

表4 場面4における「動作」・方向詞・基準点の推移

通し 番号	文 番号	動作	方向詞	基準点				
				Kawelo	おじたち	Kamalama	Kamalamaの使い	その他
155	147	hiki	maila	■				
156	147	hoouna	mai					
157	148	kii	mai		■			
158	148	kaulana	aku					■
159	149	kii	mai		■			
160	150	lawe ia	aela					■
161	150	noho	ihola					
162	151	holo	maila	■				
163	151	holo	maila	■				
164	152	lalau	ihola		■			
165	152	ai	ihola		■			
166	153	puni	ihola					■
167	153	lohi	ihola		■			
168	153	noonoo	ihola		■			
169	154	hoomanao	aela		■			
170	156	malie	ihola					■
171	156	holo	maila	■				
172	156	ao	aela					■
173	156	ike	maila	■				
174	157	ninau	akula		■			
175	159	i	mai		■			
176	160	hoi	mai		■			
177	161	olelo	akula		■			
178	162	kii	mai		■	■		
179	162	lawe	aela					■
180	162	kii	mai		■	■		
181	163	kena	aela					
182	165	olelo	aku			■		
183	166	ninau	mai				■	
184	166	hai	aku				■	
185	166	oi	aku					

表5 場面5における「動作」・方向詞・基準点の推移

通し 番号	文 番号	動作	方向詞	基準点				通し 番号	文 番号	動作	方向詞	基準点			
				Kawelo	Kamalamaの使い	Kamalama	その他					Kawelo	Kamalamaの使い	Kamalama	その他
186	167	kahuli	ihola		■			219	198	lawe ia	mai	■			
187	167	lilo	ihola		■			220	199	lalau	ihola				■
188	167	poina	ihola		■			221	200	i	aku				
189	168	kahea	akula		■			222	202	elieli	ihola				
190	169	pae	mai	■				223	202	hou	akula				■
191	170	ninau	mai		■			224	203	pa	akula				■
192	172	i	aku		■			225	203	lele	aela				
193	173	holo	mai					226	203	haule	akula				■
194	173	lohe	akula	■				227	203	paha	mai			■	
195	173	noonoo	iho	■				228	205	hele	akula	■			
196	174	hoopuka	mai		■			229	205	hoi	maila				■
197	175	aloha	mai	■				230	205	kena	akula	■			
198	177	i	aku		■			231	205	lawe	mai				
199	179	paha hou	mai		■			232	206	lawe	maila				
200	180	holo	akula		■			233	206	ai	ihola				
201	181	ae	akula		■			234	206	ai	ihola				
202	183	olelo	aku		■			235	206	maona	ihola				
203	183	manao	ihola	■				236	207	ninau	aku				
204	184	alualu	maila		■			237	208	hiki	mai				
205	184	hahai	maila		■			238	209	i	mai				
206	185	ili	ihola		■			239	210	kii	mai	■			
207	186	hai	akula		■			240	211	kauoha	mai				■
208	187	i	mai		■			241	211	kii	maila	■			
209	188	olelo	aku		■		■	242	212	kahea	akula	■			
210	188	hookoko	aku		■		■	243	213	nonoi	aku				■
211	189	pae	maila		■		■	244	214	ae	maila	■			
212	192	olelo	mai	■				245	215	i	aku				
213	194	hou	mai					246	216	-	mai				
214	194	ku	mai					247	216	-	mai				
215	194	make	iho	■				248	217	pii	akula				■
216	195	i	aku				■	249	217	i	aku	■			
217	197	ku	maila				■	250	218	ukali	aku			■	
218	197	kahea	akula	■											

特筆すべき点は、基準点に「場所」が置かれる例が少なからず見られたことである。多くの場合において、akuでは行為の主体（動い「ていく」もの）、maiは行為の先にあるモノ（動い「てくる」先）が方向判断の基準点と見られたが、それとは独立に、人物たちの住む家・土地といったある種の「ホーム」が基準点となるケースがある。さらに、その時点で（一部の例ではその後も）登場人物や劇中で言及されるモノが存在しない場所に対し、「mai（～てくる）」が使用されている例が数例見つかった。いずれの場合も、「場所に基準点を置くことができる場合がある」例として考えられる。

5.2 基準点の交替について：対話場面における不規則な交替

今回の結果からは、基準点が維持されやすい状況として、統語的な主語および動作主が変化しない場合が当てはまるといえるものの、それが交替を妨げるとはいえず、また基準点の「交替」についても有効な意味的・文法的条件は見いだせなかった。ただし、方向詞が発話動詞と共に起する場合、しかも発話が連続して行われる「対話場面」においては、一定程度の特徴がみられた。

対話のシーンは14か所あり、このうち発言者（動作主）や統語的主語が変わっても途中で基準点が交替しないものが11例と多数派であった。一方で、交互でもなく、見た目上不規則に基準点を交替する例（通し番号87-92、139-145、218-221）もあり、この場合の交替のモチベーションについて現時点では説明できない。今回の範囲では、発言動詞に付く方向詞に説明しにくい挙動が見られることは事実であるが、これもやはり別資料の同様の場面との比較が必要である。

6. 今後の課題

分析対象とする資料の拡充、とりわけ異なる書き手によるテキスト資料を対象とし、今回見られた諸特徴がどの程度一般化可能か検証する必要がある。また、今回は基準点の交替に着目するため方向詞を伴う例に特に着目したが、方向詞は必須の要素ではない。そのため、積極的に「使用しない」ことも何らかの意味・機能や条件を有する可能性があることも含めて考察を続ける。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP19K13156、JP21J01161の助成を受けたものである。

参考文献

- Cook, Kenneth William. 1996. The temporal use of Hawaiian directional particles. In: M. Putz and Rene Dirven (eds.), *The Construal of space in language and thought*, pp.455-466. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Elbert, Samuel H. 1959. *Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Elbert, Samuel H. and Mary Kawena Pukui. 1979. *Hawaiian Grammar*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Fornander, Abraham and Tohams G. Thrum. 1918. *Fornandar Collection of Hawaiian Antiquities and Folk-lore*, Second series, Part I. Honolulu: Bishop Museum Press.
- 岩崎加奈絵. 2018. 『句の中核部を形成するハワイ語の機能語— ‘anaと方向詞を中心に—』 . 博士論文.
- Schütz, Albert J., Gary N. Kahāho‘omalū Kanada and Kenneth William Cook. 2005. *Pocket Hawaiian grammar: A reference grammar in dictionary form*. Waipahu: Island Heritage Publishing.
- 塩谷亨. 2007. 「ポリネシア諸語の比較表現における方向詞」 『室蘭工業大学紀要』 Vol. 57, pp.17-24.